

# 長崎大学武藤文庫蔵『涉濤日誌二』―翻刻と解題―

前田 桂子

"Syoutou Nisshi Vol. 2" in the MUTO COLLECTION, NAGASAKI UNIVERSITY

— Republication and Commentary —

Keiko MAEDA

## 【解題】

本資料は、長崎大学附属図書館経済学部分館の武藤文庫<sup>注1</sup>が所蔵する、中本(写本、二四丁)の日記二冊のうちの一冊である<sup>注2</sup>。

一冊目は外題に直書きで「涉濤日誌 二 起丁卯二月八日」、二冊目は「涉濤日乗 二」と記され、一ページ八行の罫線と匡郭が印刷された冊子に書かれている。武藤文庫では筆者を田辺太一と推定していたようであるが、国文学研究資料館の調査とその後の研究により、筆者は山高<sup>やまなかのぶさか</sup>信離<sup>のぶ</sup>ではば間違いない。

山高信離については、小寺瑛広(二〇一一)<sup>注3</sup>に詳しい。それによると、山高は、明治期の博覧会行政、および博物館行政に携わり、初代奈良・京都帝室博物館長になった人物である。天保一三年に旗本の八男として出生し、幼名を蘭の助といった。安政三年に一

五歳で旗本山高家の養子となり山高家の家督を継ぎ、パリ万博出発前の慶応二年には従五位下石見守に叙任され、山高石見守となった。山高信離というのは明治五年以降の戸籍名である。

「涉濤日誌」は慶応三(一八六七)年二月八日から同年三月八日まで、「涉濤日乗二」は慶応三年三月七日〜同月二六日までの記事がある。信離が將軍慶喜の弟である徳川昭武に随行して、パリ万国博覧会への参加と、ヨーロッパを巡歴した旅の詳細が日並記で書かれており、記録とともに余白部分には旅先の民家と女性の服装かと思われるスケッチなどが数か所ある。ただし「涉濤日乗二」は傷みが激しく、翻刻にはかなりの困難が予想されるため、未着手である。

この「涉濤日誌」という山高の自筆本には、戸定が丘歴史館が山高家から寄託を受けた別本(山高家本)が存在する。両書を照合し

ていくと、細かい部分に違いはあるものの内容や筆跡が酷似しており、同筆とみて間違いないであろう。本書が携帯用の小型の中本なのに対し、山高家本は二七、五センチ×一八、六センチの大本である。恐らく現場で書かれた本書を元に、修正を加えながら清書したものと考えられる。山高家本が慶応二年一月二十六日(慶応三年五月一日)までの記述であることから、本書はその一部分であり、「涉濤日誌 一」という日記が存在したと思われるが、確認できていない。武藤長蔵氏が本書を入手した経路は定かではないが、古書店などで購入し、その時点ですでに端本となっていたのではないかと推察される。

本日記には、日時と船の位置を示す緯度、経度が示されている。冒頭の慶応三年二月八日は経度九十一度とあるから、インド洋上を航行していることが分かる。翌日の二月九日の緯度七度十、経度七十二度二九はインドの西のアラビア海に入っていることを示す。その後、西に進んでアデン(亜丁)に到着し、紅海を経てスエズ(本日記では蘆士)から上陸し、カイロのピラミッドを鑑賞したあと再びアレキサンデリーから地中海へと出て、イタリアのメッシーナ、フランスのマルセーユと旅を続けている。宛字や書き直しも多く判読の難しい箇所もあるが、旅の臨場感に溢れている。本書は未翻刻である。

### 【凡例】

翻刻にあたって、次の方針をとった。

\* 改行は原本に従った。各丁の一行目の下に、便宜上の丁数と表を示す記号を(一才)のように括弧で示した。

\* 削除して横に書き直した箇所は、傍点「、」を付け、判読可

能な箇所は翻刻をした。つまり、「||」は書き損じによる削除部分で判読できなかった箇所である。

\* 解読できなかった箇所は||で示した。

\* 本文には句読点はないが、読解の便宜上、読点を付した。

\* 漢字は原本に近い字体を用い、仮名は現行の文字に改めた。

### 【翻刻】

涉濤日誌 二

(一才)

二月八日 計九十一度

三月十三日

朝十時、抜錨暑氣いやましたるに旅客も又増し

ぬれは、さしも大なる船なれとも、ことに雑踏喧嘩

甚鬧障を覚ふ、第一時頃海面相をかへたれば、

人々奇異の思ひを為したり、加之朝来飛魚

の躍る事西紅海に入るより日々の事ながら、此日も

いと夥し、俗に此魚の飛は風てふといふ軻言あれば、

連日の炎晴にさしたる事もあらぬへしと思

はさりけれども、いかにも波色も面しろからされ

は、人々甲板上にて打望居る、其内鱷一二尾躍れ

る魚あり、即鱷魚の小なるものとぞ、夫よりか、いや

まして数百頭浮沈して、躍るあり蹢るありて

海波揺動す、暫して皆沈む跡なかりしが、

一陣の風俄に吹起り、||驟雨||頃盤テ来ると比しく

船の揺動も強ふなりしかば、||水夫らあわて、

帆||を捲きなどするを看て人々魂を消す、一里

程も隔つると思はしき處に、一朵の黒雲棚引わ

(二才)

たり、潮を捲あくけたるが、則龍捲なるへし、  
と見へて、女子帯の如く白練の様なるもの  
海心より彼の雲中を通す、二風弥吹募

り雨勢かゝる不量可也、龍掛なるへしとて  
奇觀を成り暫ありて彼の白練に

消て風雨共に歇たりしかは、天氣朗晴

雨後吹涼を生ず、従て舟の揺動も

静りて夢の醒たる心地こそもてる、誠に他日の  
一奇徳なり、

二月九日 緯 七度十 速二百六十七里 十四日

經 七十三度廿九 暖計 八十四度

晴風稍涼を覚ふ、海波不動

碧濃烟濃絵如席、飛魚夥飛

偶入船窓ものあり、

十日 二緯 八度〇四 速二百五十八里

經 六十九度十八 計八十四度 十五日 (三才)

晴風海波平、四顧水雲眼を遮さる

ものなし、偶波間に牛の如きもの

浮へるを見る、是海馬なるとぞ、舟と

遠ければ其体客をのこさず、遺感

と云ふへし、

十一日 緯 九度〇四 速三百七十五里

經 六十四度四十四 計八十度 十六日

炎晴午熱甚、午餐西瓜を供す氣味

淡泊なり

十二日 緯十度十五 速二百八十里 十七日

經十度〇六 計同斷

無記事

十三日晴 緯十一度三 速二百八十里 十八日

緯五十五度廿七 計七十八度

無記事

十四日晴 緯十一度五十一 速二百八十八里 十九日

經 五十度四十 計八十一度

終日亜刺比亞地方鳥嶋を見る、火山

歴々吐烟如雲、夕日没火光紅

十五日晴 緯十二度廿九 速二百九十里 廿日

經四十五度五十二

無風酷暑、海波殊に平、船穩、女席

遙鯨魚潮を吹を望

十六日 計八十四度 至此百九十六里也 廿一日

朝第六時亜丁え着す、英領ナリ 湊西山連山東南

波涛拍天山、無草木を生ず、岩石疊々

如劍鋒、連立海岸岩石尤多、依岩築

砲臺穿山通路、依嶮築疊壁、水尤乏し

拔潮去塩氣、雨水を賄ふて食料とす

山峡通溝山間に雨水を引、以城中に及す

雨三年にして或一降或五年一降、其他

連晴故山崗草木に乏し、土人真黒なり

毛髮焼爛恰も夜叉ともいふへし、駟馬

駱駝を産、夏冬の寒暖草木蘭荷を

知らず、其炎焼可思、幸にして今朝より

淡陰醸雨故暑熱不甚、第十廿時頃に

至御上陸の處一雨沛然来、問傍人に

前雨より已に三年に及ふ、近日連朝降

雨すと云し、仔家を賣ふ所に至り見るに

冢の丸むきにしたる、夫に一杯の水を

定價ありて市ふ、運駟駱駝を役す

土人の家は屋根なし、四方を圍ふたる

耳、土上席を設けて座臥於此す

卑俗可思、十一時御浄船、第三時拔錨

せり

十七日晴 緯十二度五 速 二百二十六里 廿二日

緯三十九度五十一 計 八十一度

亜弗利加諸島を西方に望ム、順風吹強

ふして舟に如矢、飛魚尤多し

十八日晴 緯十八度五十八 速 二百八十里 廿三日

緯卅七度〇四 計 八十三度

暑氣減不稍衰ふ、炎熱漸免る

十九日晴 緯 二十二度五十八 速 二百六十八里

緯 卅四度五十五 計 八十一度 廿四日

西風烈しふして船揺動女子哭泣す

るを聞く、九時頃に至弥吹募りて怒涛

上船走、涛吐雪波浪如山可崩、船飄

々、上天又下入海底、日没して漸平、晩涼

可愛激浪風死すれとも、激浪揺動船

(五才)

行すなり、在遙伊太利亜船の航行  
するを見る

廿日 晴 緯廿六度卅二 速 二百五十里

東緯三十二度四十二 計 七十八度

暑氣又減、佛の軍艦を見る、左に

阿弗利加右に亜刺比亜地方を見る、

風順にして舟平なり

廿一日晴 速二百四十里 廿五日

計 七十八度

順風に真帆かけて舟如生翅、海濤次

第に溢ふして沿海の山岳相缺、十二字

蕪士着、川蒸氣船に御乗移三里余

を馳て盤岸、佛国のコンシル卿出迎申上

客舎に御案内申たり、御逗留中警士

を備ふ、是蕪士人なり、地中海切割成切

の路は従是不及上陸、即転南東入地中海

ニ之處なり、港内川渡の機械を備へたり、

当地は埃及都府領トルコの所括なり、在昔は

殊に繁昌の土地なれども今ははや人家も壊

敗取之に無力人々敗家に起居雨露を凌ぎ

細く煙を立つる耳、さしも層樓高閣

の敗壞、有様は実に人生の盛衰とは

乍申、可憐もありあり、御夕餐後第七時

蒸氣車御乗組頭點燈、蒸氣

車の製、第一は機車次は炭車次に載

(六才)

(七才)

貨次に載人、聯貫して速すなり其速ナリ、

鐵軌を趨、其速なる事氣船も不及

自車窓窺外物、近く不為態遮眼如簾

遠は存全体なり、第一時該祿ニ達す又

此所は舊踪古跡も不少、彼ノビラミードなそいふ

古墳もあるなれとも夜中不索如何 一ミ

スタアションとて客舎あり、暫時御休息迄に

發せり車中備水薄酒果実等をたくおふ

倦臥不覺曉

二月廿二日 計七十七度

天晴、日升りて山林は淡煙似催雨とも

忽改晴となる、平地山遠ふ路傍人家ノ

田園菜本菜あり春色甚耳人家は

如大鐘、泥土を以て築之、纔に人を立す

可しと思ふ、二三小窓を穿てり、男女窺

外の体いかにもあらいる体誠可憐也、譬之

燕巢蜂巢の如し、其上に犀牛羊

喰草などして人家とは覺へ難し、

卑俗賤風以之可知なり、不待吾贅

第十一字亜拉散大に御着 客舎に御投

馬車に召して客舎に御出ありし此程

佛帝より 大君に贈呈せらる、處

度歸、暫時当家にニ養ひたりといふ、午

飯被為病たる時、当地在留コンシルゼネラール

より使を以て岡使館に御投宿ありたしと

二十七日

(八才)

申參らせしにより即○(隼人石見俊太郎御扈臣兩人ニ而) 御越相成  
なかく

壮大なる屋楼なり、第三階に被為上衛

市下睨すへし人家調重密富貴

可思、巷甚廣ふして處々ニ噴水なども

仕かけたりキ、土人は西洋商館いと多ふし、

なかにも佛人十三、七八に至る、土人は半黒ニテ

頭には白紅布を纏ふ、体には大なる風呂

敷よふの木綿を着せり、婦人は黒き廣

袖僧衣如きを着し同色のかつきを蒙

り、眼雙を耳あらはして鼻上額下より

金の飾を為したる女園布を以て面を掩ふ

美醜より難辨、當處二至雙の国ニ而

第一等第二等とあり、シルタンノ制ヲ受ク、シルタンハ度人に到

る迄て

美女を侍てるもの齡二八に至れば必納入

主家に枕籍を捧けしむる風習あり、主家

數百人、妾を擁せりといふ、トルコと同じ、

第二時頃より○第一等の王外出せしとて

第二等の王來て御尋問申せしか、纔ニ又二

人の士官を俱したる耳ニ而トルコ風の着

服冠帽子は之をとり、極めて輕而

の体さして權威あるとも見へざりし、

旦市中御遊覽のためとて馬車二領

をさし出たり、第二時頃より召之して

(二〇才)

(九才)



予も又些小なるものを得たり

廿七日 四月朔日

朝来逆風強ふして舟甚揺動、

寢室を出かねる程なりしか、余り

鬱したれば勉而甲板上に出るに

さしも多き旅客もあとたへ而、対に

寂寥たりながら歩する事も自在

ならされは、帆繩杯に扶けられな

から四眺望して山色の面白さに

時を移しいたりしか

公子にも御扈従一人を被召連御

出ありし、暫時御物語などとして

山を評水を論じて再船室二入る

此日は食盤に對せる人稀なりし

夕飯の二ハ和阿蘭の人なかりしか揺動の

さしも強くも覺へさりしが倚木転して

倒れしが少シ怪我したりき

廿八日

二日

朝来船の動揺昨日より勵し時候

も日増に、冷気になりたり、山水はいよ

く面白、近き寫嶋には芳草色また

深からず、遠き峯に村消の雪を

と、め恰も新春の景色なり、第九時

頃にハマルシカ○サルジニーの寫間を航ふす

風きへて船の揺動も少しく止たりけれ

(十四才)

は甲板上に上る、コルシカは右の方にあり

大なる寫なり、是佛国今帝の生れし

地なりとぞ

廿九日

三日

晩より西北の風となり船も揺動不

少乍去港近きに至りては風もきて

船平なり、第九時半マルセールに御着船、

海岸の砲台に祝砲を發せり、船遠

二而、且船あし早く砲發の員数分明

ならず、後二而可行、二十一発なりといふ

、さもあるへき事なり、港内いと

廣く尤岸深にて責荷を陸上げ、

せ、極め岸灣に泊せり帆、

けた岸上の港に突出する程なり、大なる

船たまり一ヶ處あり、一ツは帆前船、一ツは氣船

耳を繋げり、御上陸の節は

馬車を御船え佛国コンシール○(御國コンシールセネラール

フロリヘラルト并博覽會掛諸吏等)御出迎バッテリーにて

罷移御盤岸所、飾りたる馬車に

召され倚盤二小像前後被守衛

してガランボテルダハリといふ客舎に御

投館被遊たり、当處鎮台海陸

軍惣督市車等衣服を改めて参上

御安着を奉祝ぬ、第三字御出門

鎮台并兩惣督御尋問國亭離宮え

(一六才)

(十五才)

御出那、波烈、翁ヶ岡えいへる小高游

園え御出、港内一日、處處々に御砲台もかくは

古風なるものなり、市中御游覧景

情難難尽、今其の概略を述ん、

衢街横縦、五重の層樓連軒、

彫欄、南北に映し玉窓西東

に開、馬車阡陌に馳繁美被

窮富昌可思、第五時より演劇に

御出鎮台乃御馳走ふりし夫、

劇は感善演劇ニ御出有は男女共ニ

舞躍す、奏樂は雖盛と嘔唾嘲

晰にして難成曲言語元來不

解、感善懲惡ともに不能解

乍、去堂堂の燈火、恰如白日、紅衣

緑袍珠玉黄金、紅粉の釉

實に人目を、歛はしむるに足る

晦日

此日鎮台よりの御、待に而夕刻より

御越被遊、ふ女、奏樂杯して

旅況を奉慰、御饗応尤盛なり

朔日晴

午後写真師家被御出被為写

賢影吾樂、亦写故猶真花園に

御游覧、怪獸寄禽珍木怪草

万種あり、甚驚

(二七才)

人々心目もの也、

二日佛国軍艦碇處ニ而東南に當り

てツローンといふ處あり、御一覽ため

蒸氣車にて、第七時御発

程第九時半同處御着鎮台、

附屬士官等御出、馬車を備ふ

馬車を備へ、鎮台を始附屬役と

途に御出迎え、處ニテ

御案内申上ス、アシヨンより羽戸場

邊の間、銃隊左右に陳列

隊長は騎馬樂隊を奏賀曲、即

川蒸氣船に被、二三軍艦え御出

相成御上陸、士官尽改服御上陸ニハ

奏樂す、其内一艘ニおゐて調練を

御目過たり、熟練更可感、兵卒

の聊も不当事は更ニ感服せり、各

船祝砲を發せり、第十二時鎮台の宅

ニテ牛飲を供す珍味佳肴を呈せり

自夫馬車にて製鉄機械所え御

案内申、其宏大曾而聞しに勝る所

なり、初人知工夫の無極を知耳也、

軍船近來戦争ニ而、せし

鉄船修理に、又、鉄

造ニテ組建

鐵造大砲は、妙此類彼の

(二八才)

(二九才)



軍艦中にも数門を備たり

御一覽後、第五時半御發途ニ而第

七時御帰館なり、鉄軌左右多くは

田間菜畦花、菱隴桃李桜柳

種々の花卉盛開、恰も晩春三重

清明寒食の俱なり、墨以東台

の花を思ひ些郷思を催されたり、

三日晴

四月七日

朝十一字より市中街頭二朝の調練場ニ被出、三兵調練御一覽有之、

歩兵ミレジメント騎兵ハ小隊

砲は二坐毎大隊楽隊を備ふ、運動にして

去年東甫塞<sup>カンボク</sup>戦争、陸軍惣勢中央、有功の士官二人

、メダイを呼出し、有功報褒賞

の次第を高声ニ申渡メダイを與ふ、

士女群衆集は内に而受賞をは、当人の

心中被察たり、其翌日ニ至レハ新聞

紙中に明瞭に書載たれば、國中は勿論

吾邦他国の人迄も自知此功名を識らる、べし、

の姿なり、褒賞も如此なれハ、自然人

も勉力するか道理にして実賞一人

、勳千萬人を、も於此所知なり所

と申、古意にも自然相叶ふて更感服せり、

且日本の調練は全此兩人をの褒賞を

可行ために催せしとぞ、人心を鼓舞する

の妙處とも云ふへきか

(二一〇オ)

四日

八日

朝十字より学校

え御出有之、取、精舎

、尽御巡覽、教育の

親切更可感生徒所出、一年

の費用、寄宿料僅に九百フランク（一フランク九文京）

、食衣以之足せりといふ、

、其余不足は政府にて

備ふ、又大商富家の

寄進金にて諸事

十分なりといふ、当時

書生五百ありとぞ

五日

九日

今宵は鎮台陸軍惣督コンシールセネ

、ラー<sup>ル</sup>○メールテマルセル、其屬吏、御招待

御饗応有之陸軍惣督は楽隊

を召連御饗応中樂を奏す、

、更、詞を述て寿杯を揚グ

一同喜悅して退出す、翌日、新

聞紙中に此事を書あらはして甚称

揚したり

六日

十日

十一時 御發程鎮台コンシールゼネラル等

、火車會所迄奉見送、夕七時リヨン御

着、ホテルデヨラロツパと申客舎に御投宿、

(二一〇オ)

(二二一オ)

奥室甚美麗なり、当處は多絹を産すといふ、佛國の養蠶即当地

二現れりと云乍、欧州二而は去三ヶ年已來蠶に

流病あり、地蠶甚多數、当地二而ハ

日本蠶耳を以て織家業を営めりとぞ

是佛國第二の都会といふ、人家重

蜜馬車行、人喧嘩雑踏繁華

富饒と見へたり、夜中なれば不能尽

景情

七日

十一日

朝第七時御發、蒸気車御乗組、

夕六時都府巴里御着、佛人カシヨシ

御出迎ひ申と馬車に被召ガランホテル

デハリスと云客舎に御投宿被遊、此客

舎欧州最第一の大家のよし、且新旅客千人

を容るといふ、且新築なれば家具

ともに清潔なり、貨物を楼上に上下する

には水機を用ゆ、下等會食所に器皿を

運輸する、鉄軌火機用ゆと云ふ其大以此一

事可知也、此程魯西亜え奉使命たる

小出大和守、石川駿河守<sup>〓</sup>使命を

奉し巴里に逗留するに付早速御旅館え

罷出御案着を奉祝 吾輩一別

已来在地郷、親知故友逢ふて

独懷相語、暫忘客愁、謹興重更

(二三才)

の深

三月八日、四月十三日

<sup>〓</sup>魯国一行小出石川を初、府

属一行の者を召して晚餐を賜り

暫御物語申上テ退出す

(二四才)

注

1 長崎大学附属図書館経済学部分館にある武藤文庫は、長崎大学経済学部の前身長崎高等商業学校の教授、故武藤長蔵博士の資料である。和洋約一〇、〇〇〇冊および地図・書画・陶器等の各種資料約二〇〇点からなり、経済学関係の古典や対外交渉史関係、さらには地元長崎関係の資料など、広範囲な学問分野にわたり多くの稀覯書が含まれている。

2 一九・〇×一二・九糶、袋綴、八行、二十四丁、奥書なし。整理番号五一四、M二三〇。見返しに「田辺太一日記か可不調」と記した付箋あり。

3 小寺瑛広(二〇一一)「山高信離とその仕事 ―博物館長になった旗本―」國學院大學博物館學紀要 第三五輯

謝辞

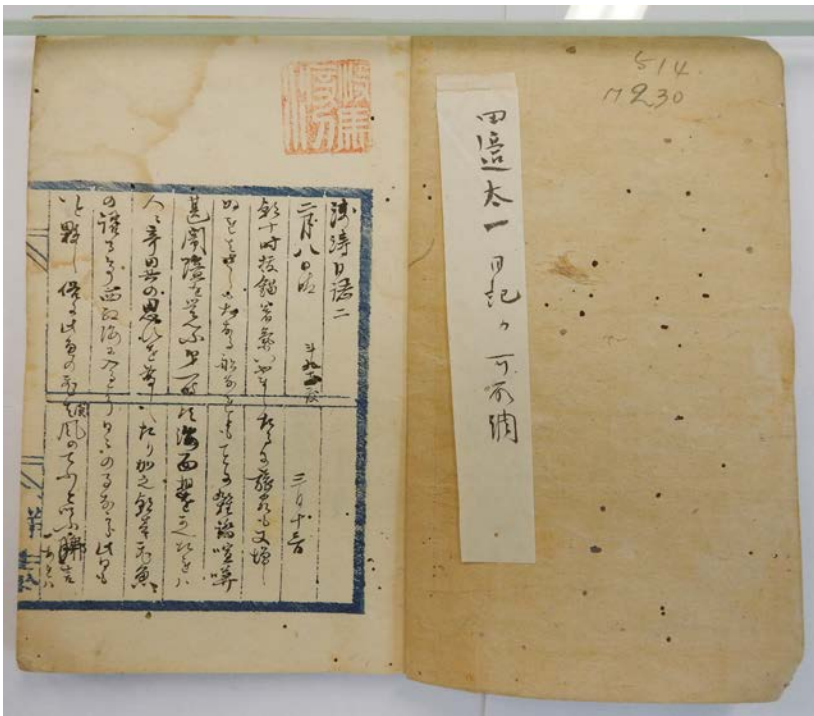
本稿の執筆に当たり、安田女子大学の吉良史明先生、長崎大学の福留真紀先生、本学名誉教授の若木太一先生、国文学研究資料館の相田満先生に大変お世話になりました。また、戸定歴史館の小寺瑛広先生には貴重な資料をご提供いただきました。感謝いたします。

【画像】

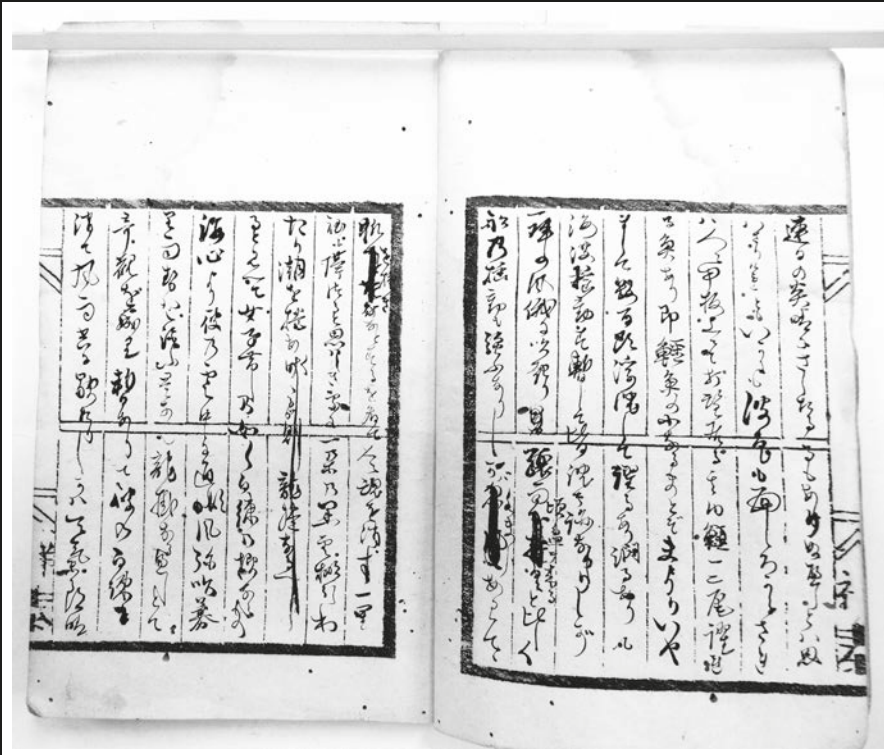
表紙



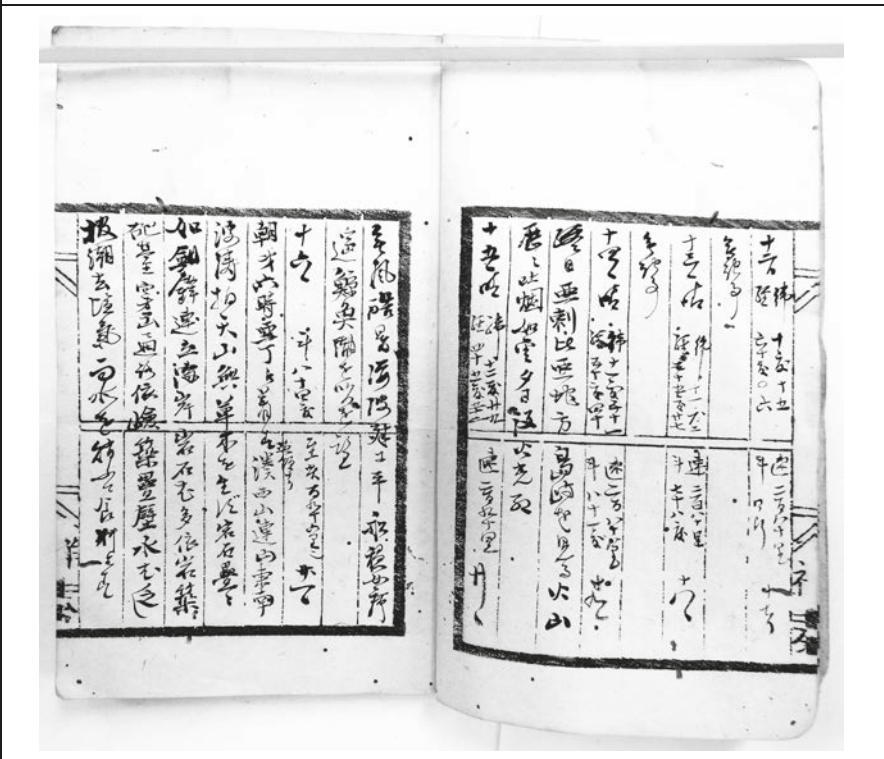
見返し、一丁表



一丁裏、二丁表 (甲板からの眺め)



三丁裏、四丁表 (垂丁に到着、洋上からの眺め)



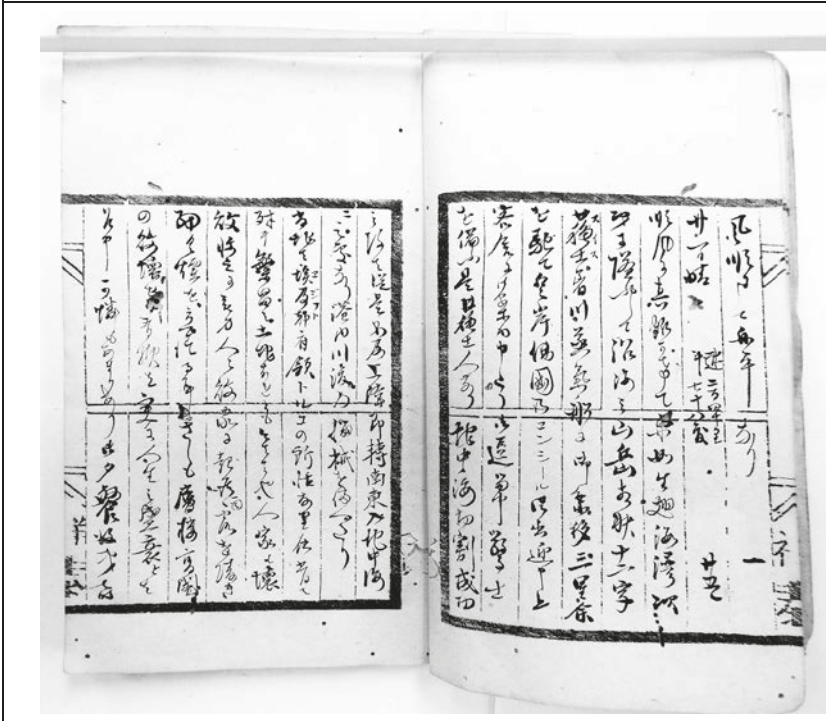
四丁裏 五丁表

(炎暑、人種および家屋の描写あり)

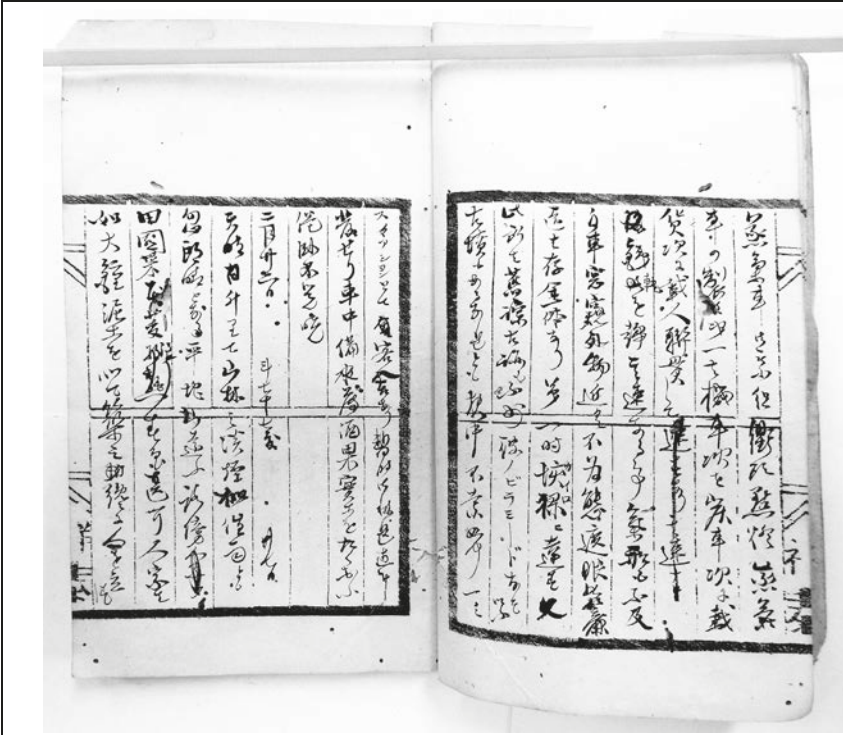


六丁裏 七丁表

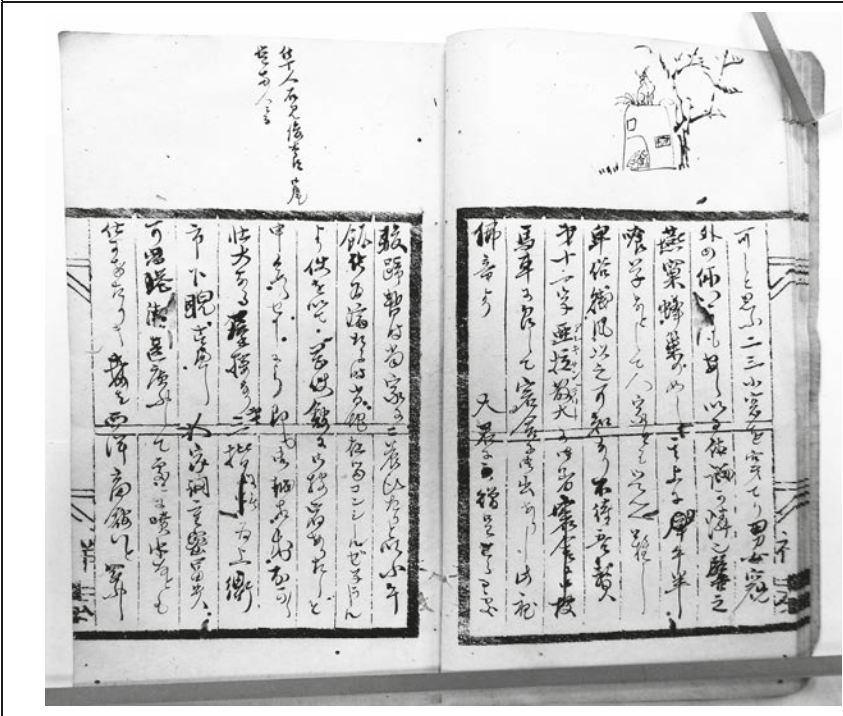
(スエズ到着。エジプトの荒廃を見る)



七丁裏、八丁表 (ピラミッド観光)



八丁裏、九丁表 (エジプトの民家、スケッチあり)



九丁裏、一〇丁表 (女性の覆面、スケッチあり)



一〇丁裏、一一丁表 (ピラミッドを見る)



一五丁裏、一六丁表 (マルセーユ着、砲台の敷に驚く)

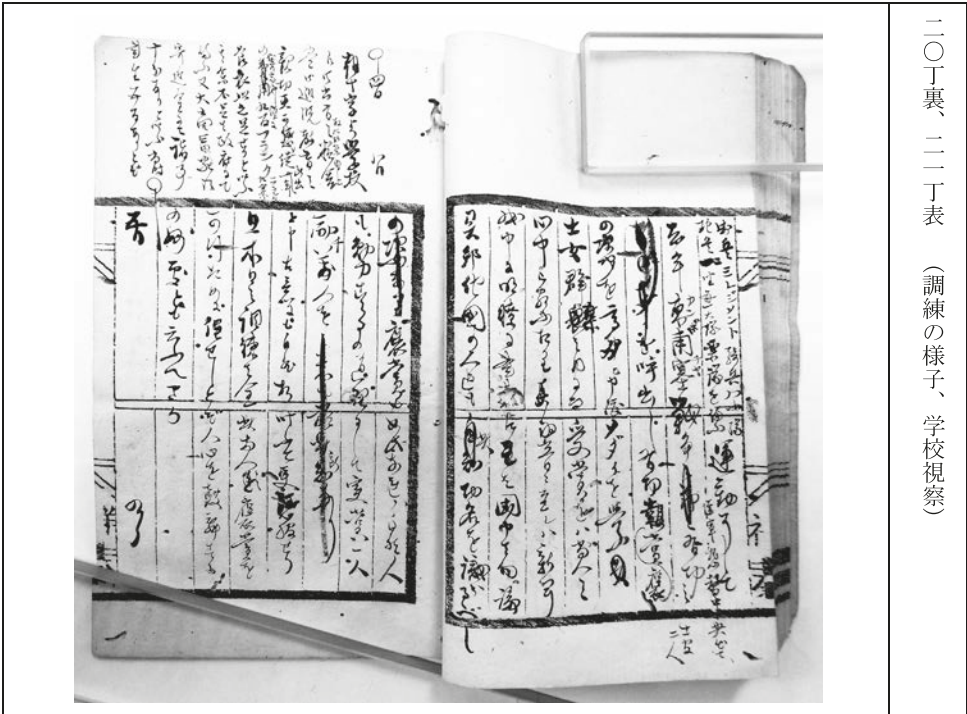


一六丁裏、一七丁表 (マルセーユ市内観光)





二〇丁裏、二二丁表（調練の様子、学校視察）



前田…長崎大学武藤文庫蔵『涉涛日誌二』—翻刻と解題—

